

# 自律的学習に関する試論

稗川信弘\*

An Essay on Autonomous Learning

HARAIKAWA Nobuhiro

## 1 はじめに

東北文化学園大学の建学の精神は、「学問・研究を通じて、自ら考える力と習慣を身につけ、(中略)さまざまな問題に対応して豊かな将来社会の開拓に寄与する」ことであり、総合政策学部総合政策学科は、「社会科学、人文科学およびその他の関連する分野を総合的に学び、研究する」ことにより、「国際社会で活躍する能力」を持つ人材を育成することを教育研究上の目的としている。

2010年度、本学は日本高等教育機構の認証評価を受審しており、本章では、その渦中にある教員の視点から大学教育の質保証問題について考察したい。前稿 [1] (章末参考文献の番号、以下同) で述べたように、入学時点までに習得すべき基礎学力の不足を補いながら、いかに大学教育の質を保証するかという問題が少なからぬ大学において共有されている [2]。このような問題を解決するために、学生の学力を診断した上で多様な学力レベルに適合的な学習機会を提供するための対策もとられているが、学力試験は直ちに本質的

---

\* 東北文化学園大学総合政策学部教授

な学習意欲<sup>1)</sup>を向上させる手段であるとはいえない。

近年、学生の「人間力」<sup>2)</sup>に着目しながら潜在的な能力を引き出そうとする大学の取り組みが脚光を浴びているが、それらの事例が稀少さゆえに注目されていることを考えれば実行可能性の低さは自明である。とはいえ、個々の学生が学ぶことを通して自分らしい生き方を希求し、それらの総和として教育の質が確保されることは大学のあるべき姿といえるだろう。

本章では、認証評価の導入によって醸成されつつある評価文化の進展という社会的潮流のなか、「自律的学習」<sup>3)</sup>を導きの糸としながら出口の見えにくい教育の質の確保という問題についての展望を提示したいと考えている<sup>4)</sup>。

## 2 自律的学習の基盤としての評価文化

「学校教育法」の改正に基づき、2004年4月に、「教育研究水準の向上に資するため、教育研究、組織運営及び施設設備等の総合的な状況に関し、政令で定める7年以内（専門職大学院は5年以内）に一度、文部科学大臣が認証する認証評価機関の実施する認証評価を受けること」を義務づけた認証評価制度が導入されてから今年で7年目となり、ほぼ一巡する。大学の認証評価機関は3つあるが、そのうちの1つであり、本学が受審している「財団法人日本高等教育評価機構」（2005年7月12日認証。以下、「評価機構」と略記）に属する会員大学は2010年9月2日現在で309校であり<sup>5)</sup>、認証評価の実施大学は2005年度4校、2006年度16校、2007年度38校、2008年度58校、2009年度71校、2010年度84校と増え、今年度中には累計271校となる<sup>6)</sup>。

- 
- 1) ここでは、「意欲」を外部環境や他者とのかかわりから生まれる内発的な意識と認識している。
  - 2) 増田 [2003] は金沢工業大学の服部陽一教授へのインタビューを踏まえ、人間力を「自己啓発力、管理力、チームワーク力、リーダーシップ力などを総合した力 [3]」であると紹介している。
  - 3) 慶應義塾大学外国語教育研究センターは学校教育の目的を「知識（のみ）ではなく、むしろ学習の技術やストラテジー」を学ぶ、すなわち、「『学びを学び』、自律的な学習者となる」こととしている ([http://aop.flang.keio.ac.jp/section\\_1/page\\_4.html](http://aop.flang.keio.ac.jp/section_1/page_4.html))。なお、ここでの「自律」とは「自分自身で立てた規範に従って行動すること」 (<http://dic.yahoo.co.jp/dsearch/0/0na/11416209412300/>) の意味であると理解している。
  - 4) 「学びて然る後に足らざるを知り、教えて然る後に困こましむを知る [4]」というのが筆者の偽らざる心境だが、多くの学生もまた同じ悩みや苦しみを抱えているのではないだろうか。
  - 5) 評価機構のHPサイト (<http://www.jihe.or.jp/kaiinkou/kaiinkou.html>) 参照。

また、「財団法人大学基準協会」(2004年8月31日認証。以下、「基準協会」と略記)に属する大学は2010年4月1日現在で正会員326校、賛助会員198校であり、基準協会が2004-2009年度の期間に認証評価を実施した大学は261校である<sup>7)</sup>。さらに、「独立行政法人大学評価・学位授与機構」(2005年1月14日認証。以下、「授与機構」と略記)が2009年度までに認証評価を実施した大学は100校である<sup>8)</sup>。

認証評価制度は、評価機関が一定の基準に基づいて定期的に評価を実施し、結果を公表することで大学等が正当な社会的評価を受けることを目的としている。すなわち、評価機関の指摘を受けた大学等が自らの努力によって問題の改善を図り、積極的に教育の質の保証を図る「評価文化」の醸成を目指しているのである。評価の対象とされるのは、教育研究、組織運営および施設設備等の総合的な状況であり、当然のことながら評価を実施する評価機関もまた文部科学大臣による認証を受けなければならない<sup>9)</sup>。

「評価機構」の「大学機関別認証評価に関する規程」<sup>10)</sup>(2005年10月28日、財高評規程第20号)第2条(大学評価の目的)では、各大学の個性・特色・特性を十分に発揮できるように配慮して定める大学評価基準に基づいて定期的に評価を行うことにより、教育研究活動等の質を保証すると謳われている。つまり、評価のプロセス、評価結果の活用を通じて各大学の教育研究活動等の改革・改善に役立て、その教育研究活動等の状況を社会に示すことによって広く社会の支持を得ることができるよう支援していくことが目指されているのである。

このため、評価に際しては、各大学の特性に配慮することによって大学の自主性と自律性を保証し、その自律的な発展を支援・促進していくとされ、画一的な評価を排し、大学の個性(建学の精神・大学の基本理念、使命・目

6) 評価機構のHPサイト ([http://www.jiheer.or.jp/download/peer\\_vol5\\_h2010.pdf](http://www.jiheer.or.jp/download/peer_vol5_h2010.pdf)) 参照。

7) 基準協会のHPサイト (<http://www.juaa.or.jp/list/university/items/index.html>) 参照。「文部科学省の平成21年度学校基本調査(2009年12月21日公表)のデータを基にした」と説明されている大学総数は773校であり、未入会の大学は249校とされている。

8) 授与機構のHPサイト ([http://www.niad.ac.jp/n\\_hyouka/daigaku/hyouka/index.html](http://www.niad.ac.jp/n_hyouka/daigaku/hyouka/index.html)) に示されている2005-2009年度における大学機関別認証評価の各年度実施分から算出した。

9) 文部科学大臣への申請に基づいて認証基準に適合するか否かの検証がなされ、適合すると認められた場合には、中央教育審議会に諮問された上で認証されることになる。

10) 評価機構のHPサイト ([http://www.jiheer.or.jp/download/h23\\_19\\_hyoka\\_kitei20.pdf](http://www.jiheer.or.jp/download/h23_19_hyoka_kitei20.pdf)) 参照。

的)を重視しながら、教育活動を中心に総合的な状況を評価するとしている。その上で、実効性を担保するために評価結果を文部科学大臣に報告するとともに、刊行物やインターネット等の方法で公表しているのである。

この背景には、大学の教育研究等の諸活動の向上や経営改革のために評価が不可欠な手段であり、評価結果を承けた各大学の自己改革によって目指すべき理念が実現されうるという精神的風土(あるいは評価文化)への信頼が存在している。したがって、評価はあくまでも目的の達成を目指すスタートラインであってゴールではないという点を改めて認識すべきであろう。

また、いかに厳格な評価がなされるにせよ、その客観性や妥当性もまた相対的なものにすぎず、評価にあたっては各大学と評価機構とのコミュニケーションを重視し、評価機構が一方的に判断をしてその結果を公表することがないように配慮している点は注目に値する。すなわち、評価機構が各大学の評価を一方的に定めるのではなく、大学からの意見申立て制度を整備するとともに、評価プロセス、方法および結果の公表により、透明性が高く、開放的な評価が目指されており、それが評価機構の評価に対する各大学からのアンケートや社会からの幅広い意見を取り入れるシステムなどによって補完・強化されているのである。

以上の点に関連して、授与機構が、大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について——競争的環境の中で個性が輝く大学」を踏まえ、第三者評価を「各大学が画一的な教育を行うのではなく、互いに切磋琢磨しながら多様化・個性化を推進し、教育研究面での個性を輝かせるための手段である」<sup>11)</sup>とした点は注目すべきであろう。ここで、認証評価の目的は、①大学の教育研究活動等の質の保証、②各大学の教育研究活動等の改善、③公共的機関としての大学に対する国民の理解と支持という面から定義されるとともに、根拠資料やデータが欠落した自己評価や評価報告書では第三者に対する説明責任が果たせないとして、客観的根拠に基づく評価が強調されているのである。さらに、入学試験の難易度や就職のランキングなど入口と出口のみが重視され、「教育の質」の保証が求められてこなかった大学評価の間

---

11) この箇所は、2006年3月17日に開催された「授与機構」主催のシンポジウム『大学評価に期待するもの』における基調講演「大学評価とは何か」(川口昭彦)に基づいている。  
([http://www.niad.ac.jp/sub\\_hyouka/daigaku\\_180317\\_kityoukouen.pdf](http://www.niad.ac.jp/sub_hyouka/daigaku_180317_kityoukouen.pdf)) 参照。

題点が指摘され、それらを明確化する第三者評価の役割が位置づけられている<sup>12)</sup>。

### 3 認証評価と自律的学習の支援との関係

次に、金沢工業大学を事例として、認証評価機関による大学の受審過程と、大学教員による学生の評価過程（成績評価など）との間に存在する一種の入れ子構造<sup>13)</sup>について論じたい。ただし、とくに断らない限り、以下の検討素材については金沢工業大学の HP 上に掲載されている『評価報告書』、および『自己評価報告書』を参照させていただいたものである。

「評価機構」による同大学の 2005 年度『評価報告書』<sup>14)</sup>は「自ら考え行動する技術者」の育成という教育目標の下に問題発見・解決型教育システムの構築を目指し、人間形成のための教養教育と技術者養成のための専門教育を適切に編成していると評価している。また、学部横断的組織である教育支援機構が独自の学生支援策を講じている点を非常に優れた取組みと評価し、その下部組織である「夢工房」を学生が自由に活用できる自主的な「ものづくりの場」であり、創造的な課外活動の支援としても大きな教育成果をあげていると高く評価している<sup>15)</sup>。

同大学の『自己評価報告書』<sup>16)</sup>によれば、初年次教育として学習スタイルを早期に育成する修学基礎教育を行い、その後、工学基礎教育を経由して専門教育につなぐことで多様な学習形態を経験した学生の受け入れにともなう基礎・専門基礎学力の不足や学習意欲自体の低い学生への対応を図ろうと苦心していることが読み取れる。また、1995 年度から 3 学期制に移行し、1 学期当たりの開講科目数を 5-6 科目に減少させるとともに、1 科目当たりの単位数を 2 単位（週 2 回）から 3 単位（週 3 回）に変更して各科目の理解度を向上させ、同時に、従来 90 分であった授業時間を学生が集中力を持続し

12) 11) に同じ。

13) 大学教育の妥当性は教育目標と教育成果との比較から定性・定量的に示されるが、同時に、その構成要素である個別の教育方法の妥当性はそれへの寄与度から示されるという構造である。

14) 金沢工業大学 (<http://www.kanazawa-it.ac.jp/jiheepdf/h17hyoukahoukoku.pdf>) 参照。

15) この評価は、同大学における学生の人間力向上に着目した地道な教育支援活動に対してなされたものであって、「教育支援機構」という組織形態が評価されているわけではない。

16) 以下の記述は、金沢工業大学 (<http://www.kanazawa-it.ac.jp/jiheepdf/01-19.pdf>) 参照。

て受講できる（その結果、教育効果の向上が期待できる）ように、60分に短縮して学生の積極的な自学・自習活動を促進させるといった配慮もなされており、学生の目線から教育を考えていこうとする姿勢がその点からも伺われる。

なお、修学基礎教育は、①修学基礎能力演習、②自己啓発セミナー（進路教育）、③基礎学力の確認、④コンピュータ基礎演習、⑤学習計画の立案等のカリキュラムから構成され、導入教育では、学力の多様性や高校での学習内容の相違などに対応するために、1年次の春学期を大学教育の準備期間と位置づけ、「プレースメント英語」<sup>17)</sup>等の科目を開講して中等教育から高等教育への円滑なつながりを図るための教育を実施しているとされている。

さらに、工業大学とはいえ、グローバル化する世界のなかで教育目標である「行動する技術者」を育成するためには英語のコミュニケーション能力の向上が不可欠であるとの認識に基づいて、英語を必修科目とし、実践的な（使える）英語能力の育成を目的とした教育が行われている。すなわち、学生は入学後に履修する「プレースメント英語」で実施される英語力診断テストを受けることによって自己の英語力を確認し、その上で、英語担当教員から紹介される自習用の学習プログラムに従って自分に合った学習方法を身につけ、秋学期からそれぞれの学生の実力に応じた科目メニューを選択履修（科目は必修）することができるかとされている。

このように、語学教育では、2002年度に開設された基礎英語教育センター（EEC：Essential English Center）を中心として英語教育の充実を図る<sup>18)</sup>とともに、基礎的な英語力を持つ学生に対する能力向上へのインセンティブを与えるために、TOEICを受験して基準点（300点）以上を取得した学生に対し、英語Ⅲ、英語Ⅳ、英語Ⅴの単位を認定する制度を導入している<sup>19)</sup>。

この他、教育効果の検討や教育方法の改善を図るために、学内では、授業

17) 英語の基本スキル、語彙の学習方法、英語での表現力の習得などを指導し、科目のなかで行われる試験の結果により秋学期から始まる英語科目の履修コースを決定すると説明されている。さらに、この時期には「人間形成基礎教育」が行われるが、それは学生と教員間のコミュニケーションを図りながら、社会人としての基礎的能力（読む・書く・聞く・話す・考える）、国際的感覚および工学技術者としての哲学や倫理観などを育成するものである。ただし、それらの能力は、学生生活を通して学生自身が築き上げていくことこそが最も重要であるとされている。

18) EECはきめ細かな英語学習プログラムの開発と、実践的な英語能力の育成を目指している。

評価アンケートの結果を個々の教員にフィードバックする<sup>20)</sup>とともに、学外では、卒業生や就職先の企業に対して包括的なアンケート調査を行い、企業が求める能力や人材の具体像、卒業生の評価等を調査し、学習・教育の改善のために活用していると説明されている。

以上、金沢工業大学の教育目標や教育方法には、教育目標やその成果について学生と教員が共通の理解に基づいて評価文化を根づかせようとする点において認証評価制度との関連性が認められる。すなわち、この事例は、学生の個性を輝かせる教育（教育の質の確保へのプロセスづくり）の実践には、学生と教員との相互理解（合意形成）の推進と同時に、保護者等の利害関係者および第三者を含む学外の意見を幅広く聴取することにより、教育目標とその実現手段である教育方法の妥当性を担保し、透明性が高く、内部において双方向的であり、外部に向けて開かれた活動の充実が求められることを示唆している。そのためには、変わることのない「建学の精神」に基づく明確な「教育理念」の堅持が求められることはいうまでもない。

#### 4 自律的学習の実践事例——自分らしい生き方を求めて

「認証評価」について理念先行型の説明を繰り返してきたが、これでは一向に「教育の質」という実体は見えてこない<sup>21)</sup>。「多様化・個性化を推進し、学生の個性を輝かせる」という言説の紹介だけでは単なる空文句にすぎない。実際、どんなイメージを想定すればよいのだろうか。以下では、筆者が悩み苦しみながら暗中模索している最中<sup>さなか</sup>に行き着いたある事例、すなわち、自律的学習によって基礎学力の不足を克服したある人の事例を紹介したい。

19) 当該制度適用による平成14年度の単位認定者は50名とされている。2008年時点でTOEICを単位認定に活用しているのは331大学、単位認定スコアは950点（群馬県立女子大学）-255点（共栄大学）まで多様な分布を示している[5]。認定基準の設定に際しては、他の認定方法との公平性やインセンティブとしての妥当性に配慮したスコア設定が肝要であると考えられる。

20) 授業評価アンケートは教員にフィードバックされ、教育の充実・改善が図られるだけではなく、学生が自己の学習プロセスの成果を確認し、当期の学習目標の達成度を反省して次期の目的指向型カリキュラムの編成や学習計画を立てる際にも役立てられ、その意味で、教員と学生が相互に学習・教育目標の達成度を確認するために活用されている。

21) 現在のわが国の大学社会における「評価文化」の醸成はいまだに現在進行形のものであるという客観的な状況とは関係なく、この原因は偏にこれまでの筆者自身の学びの浅薄さによるものである。

小学校の低学年から、いじめなどの原因により学習環境に恵まれず、中学卒業時点においても「数学は九九が2の段までしか言えない、英語はbookしか書けない、漢字は自分の名前しか書けない [6]」といった具合で成績不振を極めたその人（宮本延春氏）は自著のなかで学習過程に関する考えを以下のように述べている。

基本練習は一見地味で、面白くなく、退屈な感じがしますが、（中略）スポーツ、芸術、学問、人生、全てこれなくして成り立つものは一つもありません。基本ができていないことには、次の段階へは進めないのです [7]。

宮本氏は、小学校の頃に分数で躓いた原因が学習環境を阻害する「生活環境や家庭環境 [8]」と「学ぶ目標 [9]」の欠落にあったと分析している<sup>22)</sup>。しかし、彼はなぜ23歳にもなってから、定職に就いていたにもかかわらず、基本を身に付けるために小学3年用のドリルを勉強し始めようと決意できたのだろうか。彼の学習意欲を刺激したのは1本のビデオテープであった。付き合っていた彼女が録画してくれたそのビデオ『アインシュタイン・ロマン』（NHK スペシャル）を見た彼はアインシュタインの説く世界に魅了され<sup>23)</sup>、物理学を勉強するためにどうしても高校・大学に進学したいと思うようになったという。

小学三年のドリルをやりながら漠然と思い描いていた将来の夢は、やがて確信に変わりました。高校だけでは十分ではない、絶対に大学に行くぞ。まだ高校にも入っていないときから、そう心に決めていました [12]。

22) ここでの「生活環境」の破壊は学校での「いじめ」が主原因であった。他者の学習意欲や生きる目標を奪うという点からも「いじめ」はきわめて卑劣な犯罪行為であり、宮本氏は「いじめ」を断じて許さないと宣言している。かかる感性は、人間が具備すべき最低限の倫理観に基づくものであり、少なくとも学校教育に関係するすべての者によって共有されなければならないと考える。

23) 「この番組で私は相対性理論の初歩を理解し、そしてそれは、私の時間や空間に対する常識を粉々に打ち砕いたのです [10]」。別の箇所では、90分のそのビデオが「今までに味わったことのない知的興奮を初めて体験させてくれ [11]」た、と述べている。その体験が彼の「学習意欲」のスイッチを点灯した、とでもいうべきなのだろうか。



建設会社で働きながら仕事の合間を縫って猛勉強をした宮本氏は24歳の春、定時制高校に入学することができた。さらに、27歳で名古屋大学理学部に入学後、31歳で大学院に進学し、現在、母校（豊川高校）で数学を教えている彼は生徒に「学ぶ意味」を質問された時に以下のように答えているという。「(自分にとって価値のある)目標を達成させるための努力こそが、『学ぶ』という行為こういそのものなのです [13]」。つまり、宮本氏にとって「学ぶ」とは、「夢を現実に変える、その来るべき日のために、『学び方』を学ぶ [14]」ことを意味しているのである。

ソローが述べているように、私たち人間の使命ミッションとは自らの精神の力によって自己の心身を日々創造していく芸術活動であるといえるのかもしれない。

Every man is the builder of a temple, called his body, to the god he worships, after a style purely his own, nor can he get off by hammering marble instead. We are all sculptors and painters, and our own flesh and blood and bones [15]. (誰もが崇拝する神のために自分の方法で「心身」という名の神殿を建てる。その代わりに、大理石の神殿の建造に従事して済ませるといわけにはいかないのである。私たちは皆、彫刻家兼画家スカルプチュア ペインターであり、その素材は私たち自身の血と肉と骨である<sup>24)</sup>.)

荘厳なる神殿や大寺院の建設という国家的プロジェクトと日々の個人的な活動（私たち自身による心身の創造）とは、大学における認証評価と授業評価と同様に相似形をなすものであろう。いかに前者が厳かで立派な仕事であろうとも後者を代替することはできない。

ソローとの今一つの共通性という点において、転機となった宮本氏の17歳の思いに注目したい。「死ぬまでの残された時間は知る由よしもないが、その死ぬ間際まぎわ こうかいに後悔だけはしたくない。少なくとも、やれば良かったのに、どうしてあのときやらなかったのだろうという後悔だけはしたくない [17]」。以下、ソローの言葉を再確認してみたい。

24) 筆者による仮訳である。H.D.ソロー、飯田実訳 [1995] [16]などを参照のこと。人間の身体と精神との統合的な関係を表現するために、敢えて“body”を「心身」と訳している。

I went to the woods because I wished to live deliberately, to front only the essential facts of life, and see if I could not learn what it had to teach, and not, when I came to die, discover that I had not lived. I did not wish to live what was not life, living is so dear; nor did I wish to practise resignation, unless it was quite necessary. [18]<sup>25)</sup>

(生きることの本質的な事実だけに向き合い、それが教えてくれたはずのことが学べていない自分を知ろうと私は森に行った。死ぬ間際に、自分の人生を後悔したくなかった。生きることはとても大切だから、自分らしくない生き方はしたくなかった。本当に必要でない限り、(それを)諦めるつもりもなかった<sup>26)</sup>.)

ハーヴァード大学を20歳で卒業したソローが、ウォールデン湖畔の森の中で28歳の頃から2年余りの歳月をかけて考えたこととほぼ同じ内容を宮本氏は17歳の時に考え、決意している。それは単なる偶然の一致にすぎないのだろうか。おそらく、そうではないだろう。両者の時代背景や社会環境は大きく異なるものの、それぞれの「思い」に先行する主観的現実において、両者の間には何らかの共通性があると考えられる。他者を含む環境がいかに多様であろうと、「思い」という設計図に基づき、「身体」という素材から自己を創造しうるのは「生き方」を選ぶ本人であり、その現実的過程を間近でつぶさに観察するのも本人である。

## 5 英語の学習意欲向上策——今ここで生まれる事例

総合政策学は専門分化した多様な学問領域を結びつけ、現代社会の複層的な問題を実践的に解決することを使命<sup>ミッション</sup>としている。開学以来の教育目標として、「国際社会で活躍しうる能力」の育成を掲げ、コミュニケーション手段として語学力の習得を重視している。また、過去において、「TOEICの高得

25) この文章はソローが森に入ってから3日目(1845年7月6日)の日記に基づいているという指摘がある。“I wish to meet the fact of life—the vital facts, which are the phenomena of actuality the gods meant to show us—face to face, and so I came down here. Life! Who knows what it is, what it does?” [19]

26) 筆者による仮訳である。H.D.ソロー、飯田実訳[1995]<sup>[20]</sup>などを参照のこと。

点を得る実力をつける [21]」ことが教育目標として明記された経緯もある。

総合政策学科の1年次学生が全員受験する TOEIC Bridge、および全学科の学生が希望により受験する TOEIC-IP テスト<sup>27)</sup>はその一環として実施されているものであり、当然のごとく、実践的な英語教育にける本学の英語担当教員の熱意は決して金沢工業大学に劣るものではない。

周知のように、TOEICは120分間の試験時間でリスニング(45分)とリーディング(75分)が各100問ずつ、計200問が出題され、それらの問題に迅速に対応する能力が求められる<sup>28)</sup>。両者がバランスよく配置され、出題内容も日常生活の出来事から実際のビジネス場面までを幅広く網羅していることから英語能力を測るツールとして広く利用され、ビジネス現場で役立つ実践的な英語能力を求める企業の要請にも応えうる優れた教育・教材と位置づけられている。したがって、学生にとっては自己の英語力を試す絶好の機会になると考えられる<sup>29)</sup>。

現在、筆者は「グリーンツーリズム論」の講義でIBCパブリッシング社から出版されているH.D.ソロー著『ウォールデン』の要約版を教科書として使用している<sup>30)</sup>。本学部は1年次には週3回の必修科目として英語を勉強するが、2年次以降、専門課程では英語に触れる機会が減少する傾向にあるため、できるだけ多くの講義に外国書講読的な形態を導入して「国際社会で活躍しうる能力」の育成を目指しながら、英語に触れる機会を増やそうと努めている。

27) TOEICはTest of English for International Communication(国際コミュニケーション英語能力テスト)の略称であり、Bridgeは初・中級の英語学習者を対象に開発されたテストであり、受験の目安はTOEICスコア450点以下とされている。また、IPはInstitutional Program(団体特別受験制度)の略称である。

28) 200問の問題全体は、①写真描写(Photographs)、②応答(Question-Response)、③会話(Short Conversation)、④説明文(Short Talks)、⑤短文穴埋め(Incomplete Sentences)、⑥長文穴埋め(Text Completion)、⑦読解(Reading Comprehension)という7つのパートに区分されている。

29) 2010年は12月4日に実施され、筆者も受験させていただいた。2時間の長丁場ということもあり、いわば英語で走る「校内マラソン」のように感じられた。

30) このテキストの使用語数は1,600語、センテンス数は約930でTOEICのスコアで400点以上とされているが、アメリカ自然保護思想の源流に位置づけられるソローの哲学的思想にふれるこのテキストの内容は、実践的な英語教育の対極にあると言わざるをえないだろう。とはいえ、深遠な思想にふれる機会も大学教育には必要であると考え、多面的な要素からなるさまざまな能力を総合することによって、初めて紛糾した現実問題を解決する実践的な力を発揮することが可能になるのである。

しかし、英語の学力試験が直ちに英語の学習意欲の向上につながるものではないと同様に、英語教材の導入が直ちに英語の学習意欲を高めてくれるわけではない。専門分野での学習意欲の向上、さらに、それがもたらす教育・研究の深化というベクトルを学生の英語能力の向上に結びつけるにはどうすればよいか、という点が実現困難な当面の課題となっている。

とはいえ、この問題に関する解決への展望が見えていないわけではない。講義方法の改善や教材の創意工夫に加え、英語を母国語とする先生方とのコミュニケーションを図るとともに、夏期休暇時の海外短期留学等を組み合わせることによって英語学習に対する学生の潜在的なニーズを引き出すことは可能であろう<sup>31)</sup>。多彩な分野の教員構成を持つ本学部の特徴はそれらの方法を実行しやすいものに行っていると考えられる。もちろん、それは単に英語力の向上という局面に限定されるものではなく、多くの教育場面において多面的に展開しうるものであろう。それらの取り組みは本学部独自の「教育の質」の確保へとつながるものであると確信しており、評価文化の薫陶を受けた本学における自律的学習の萌芽が、今まさしく、この学部から生まれつつあると感じているのは筆者ばかりではないだろう。

## 6 補論——TBGU ベーシックテストを事例に

冒頭で述べたように、本稿では、学生が自ら意欲的に学ぼうとするプロセスを「自律的学習」という用語によって把握した上で、認証評価が対象大学の教育方法の改善を促し、それにより学生の自律的学習が促進されるという効果（「教育の質」保証効果）について論じようとした。

最後に、本学1年次の学生を対象に実施された「TBGU ベーシックテスト<sup>32)</sup>」の結果から、その効果が顕在化する過程で起こりうる問題点を確認しておきたい。図1に示されるように、在籍者数に対する受験者数の割合を示す「受験率」の格差が学部、学科間において顕著である。すなわち、図1の

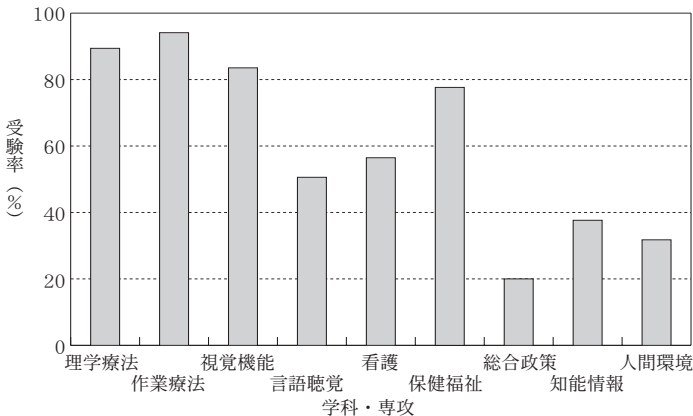
31) この点に関して、山口大学が取り組んできた事例が参考になると考えている [22]。

32) 学生の基礎学力を確認するとともに、学力の向上につながる学修支援策について検討するため、2010年度入学生を対象として2010年11月20日（土）、9:30-11:30、国語、数学、英語に関する試験が実施された。各科目の試験時間は30分間で、科目間には15分間の休憩時間が挿入された。

棒グラフで左から6番目までに示される医療福祉学部の各学科・専攻（リハビリテーション学科の理学療法，作業療法，視覚機能，言語聴覚の4専攻と看護学科，保健福祉学科）の受験率76.4%（ほぼ4人中3人が受験）に対し，科学技術学部（知能情報，人間環境学科）は35.4%（ほぼ3人に1人），総合政策学部は20.0%（5人に1人）という水準である<sup>33)</sup>。

学力試験に対して忌避的態度を示す学生の学習意欲を向上するためには，「建学の精神」や「教育理念」との整合性に配慮しながら，学生の個性やニーズに適合的な教育目標と教育方法について再検討することが求められる。認証評価はそのプロセスの一環として実施されるものであり，その際に，自律的学習あるいは学生の自律性が重視されるべきであるとする。

図1 TBGU ベーシックテスト：学科・専攻別の受験率（国語）



## 参考文献

- [1] 稜川信弘・河本進 [2010], 「大学全入の一断片に関する考察——東北文化学園総合政策学部の事例」『総合政策論集』東北文化学園大学総合政策学部, pp.1-15.
- [2] 岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄編 [1999], 『分数のできない大学生——21世紀の日本が危ない』東洋経済新報社, p.i.

33) 些末なことではあるが，医療福祉学部の受験者数が2時限目の数学，3限目の国語と僅かながら増えていったのに対し，総合政策学部の受験者数は逆に減少している。

- [3] 増田晶文 [2003], 『大学は学生に何ができるか——「学生を元気にさせる」大学改革とは』プレジデント社, p.131.
- [4] 守屋洋 [1987], 『中国古典 一日一言』PHP 研究所, p.198.
- [5] 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会 [2009], 『TOEIC テスト 入学試験・単位認定における活用状況——大学院・大学・短期大学・高等専門学校』, pp.35, 47.
- [6] 宮本延春 [2009], 『オール1の落ちこぼれ, 教師になる』角川書店, p.26.
- [7] 同上書, p.187.
- [8] 同上書, p.96.
- [9] 同上書, p.96.
- [10] 同上書, p.88.
- [11] 同上書, p.85.
- [12] 同上書, p.109.
- [13] 同上書, p.186.
- [14] 同上書, p.194.
- [15] Henry David Thoreau [1995], *WALDEN: or Life in the woods*, Dover Publications, (Firstly published by Ticknor and Fields in 1854), p.144.
- [16] H.D.ソロー, 飯田実訳 [1995], 『森の生活 (下)——ウォールデン』岩波書店, p.94.
- [17] 宮本延春, 前掲書, p.70.
- [18] Henry David Thoreau, *ibid.*, p.59.
- [19] 稲本正 [2004], 「環境問題におけるソローの現代的意味」, 日本ソロー学会編 『新たな夜明け——『ウォールデン』出版150年記念論集』金星堂, pp.7-8, 17.
- [20] H.D.ソロー, 飯田実訳 [1995], 『森の生活 (上)——ウォールデン』岩波書店, pp. 162-163.
- [21] 東北文化学園大学 [2003], 『平成15年度 東北文化学園大学学生便覧』, p.43.
- [22] 山口大学大学教育機構大学教育センター [2008], 『TOEIC を活用した英語カリキュラム——教育の水準保証と学習支援 (平成16年度採択特色 GP 報告書)』.

*file 4*

# 総合政策学アーティクル

---



「file 4 総合政策学アーティクル」には、内外の専門研究者による  
査読によって認められた論文を掲載しています。